

### Ⅲ 平城京内寺院の調査

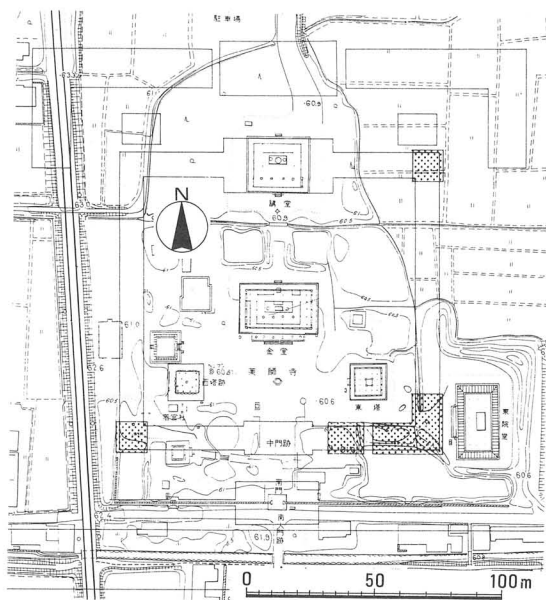
#### 1 薬師寺回廊の調査

薬師寺は、金堂・西塔・中門の再建に引続いて、中門の両側に取付く南面回廊を再建する計画を持っている。南面回廊の設計に先立って、基壇規模・柱間などの資料を得るために南面回廊跡と、さらに回廊が藍伽中軸線に対して方位が振れているかどうかを知るために回廊東北隅・回廊西南隅の計3カ所で発掘調査を行った。発掘調査は昭和60年1月16日～4月27日に実施し、発掘調査面積は東南隅区700㎡、東北隅区150㎡、西南隅区150㎡である。

回廊については、昭和29年度の中門の発掘調査や、その後昭和40年代前半期の杉山信三氏等による一連の発掘調査がある。その成果によれば、回廊は桁行14尺、梁行各10尺の複廊で、回廊の基壇外装は凝灰岩切石であることが知られる。さらに当調査部による昭和57年度の中門の発掘調査でも、中門東に取付く複廊を検出し、これまでの成果を確認した。しかし、複廊の桁行柱間については、14尺の完

数とはならず、12尺強と考えられ、中門の取付き部分で柱間を調整していると考えられた。

今回の回廊の発掘調査では、まず想定通り複廊の柱位置や基壇外装を検出した。この成果に加えて、注目されるのは、複廊に先行する単廊の柱位置を示す礎石跡を検出したことである。また、回廊内の水を排水する暗渠施設を検出したこと、天禄に罹災し復興された複廊のその後の再建回廊と考えられる礎石および礎石跡を検出したことな



第28図 薬師寺回廊発掘調査位置図

ども成果にあげられよう。

## 遺 構

まず、各発掘区で検出した主な遺構を報告する。

**東南隅区** 東院堂の西南部は、昭和30年代後半まで存続していた近世の池のため、基壇南辺は大きく破壊されている。遺構検出面より上層は細砂層が厚く堆積し、何度も水が流れて冠水したことを示す。

検出した遺構は単廊及び複廊の礎石据付穴・礎石抜取穴、複廊基壇、近世の給水施設などがある。遺構面の層位と、単廊の礎石抜取穴を複廊の礎石抜取穴が切ることから単廊の礎石抜取穴が先行することがわかる。南側のうち中門に近い部分や東面回廊の両側では凝灰岩基壇外装を検出した。

単廊の礎石抜取穴は径0.8～1 mの円形の穴で、礎石据付穴と重複している。礎石据付穴の底部はわずかに認められた。単廊の礎石抜取穴の埋土と単廊基壇から複廊基壇への拡幅部の基壇土は同一と認められ、単廊の礎石抜取と基壇拡幅の工事が同時に進行していることをうかがわせる。基壇を梁行方向に断割り、断面土層を観察すると、単廊の基壇は地山をいったん削って、ほぼ水平にならし、その上に、基壇土を積み上げていることがわかった。この基壇の両端はなだらかに下っている。基壇外装を設けた場合基壇外面がほぼ垂直になるので、断面から観察できる単廊基壇は外装工事に至らなかったと判断できる。中門の東約15mほどのところで、地山直上に東西に並ぶ瓦敷列を3.5m検出した。その東3.5mのトレンチでも同様の瓦敷列を検出し、ここまではのびていると考えられる。この瓦敷列の位置は、単廊造成の南端に当たるので基壇築成時の見切りか、藍伽造営時の最初の地割計画に関連するものであろう。



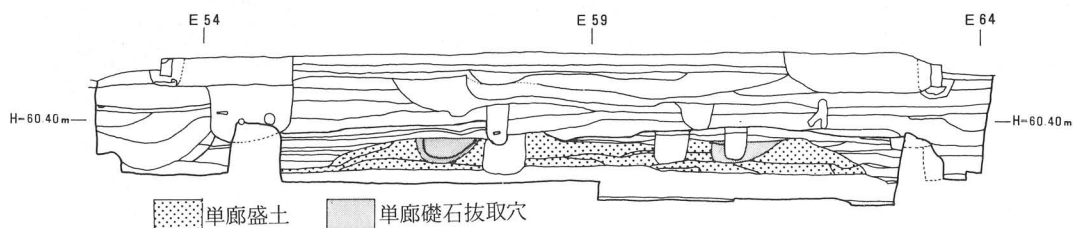
第29図 東南隅区（東から）

複廊の礎石抜取穴は2時期あり、上層は30～40cmの円形穴、下層は長さ1m、幅60～70cmの長円形であり、これに礎石据付穴が重複している。据付穴は1.5mの隅丸方形である。この礎石抜取穴を断割って観察したところ、穴の底部には瓦を敷いている。東南隅区の南中央部では、中世の瓦溜が基壇上面を破壊していて、単廊・複廊の礎石抜取穴などを検出できなかった。

基壇外装の遺存状態の良好なところを観察すると、長さ80cmほどの長方形断面の上に、凝灰岩の崩れた塊がある。長方形断面の石は羽目石、塊の石は葛石と考えられる。羽目石がのこって地覆石が失なわれることは考えられず、基壇外装は地覆石を用いず羽目石を立ち上げて葛石を置いたものであろう。羽目石はどの石もほぼ一様に外側上の隅が欠損している。羽目石は復原すると縦45cm・横20cmほどの長方形断面である。葛石は砕けていて当初の位置、大きさを知ることはできない。東南隅区では複廊礎石位置の中間に小掘立柱穴6カ所を検出した。いずれも30cm前後の小さい穴である。複廊を建設する際の足場穴と考えられる。

東塔の南辺付近では回廊基壇上面に凝灰石切石2カ所を検出している。棟通りにあたる位置のものは、下の地覆石と考えられる。また東にある約方1mにわたって広がる凝灰岩は、上面がほぼ水平に残り、目地が認められるので、複廊の床面は凝灰岩切石で舗装されていたと考えられる。東面回廊の東西両側の雨落溝は、基壇外装を内側縁石とし、外側を玉石列とする。薬師寺における既発掘調査の所見から、当初は外側縁石も凝灰石であったと推定されるので、玉石列は後補であろう。中門東脇は基壇面が高く残るので、中門基壇に向って回廊基壇が高くなっていったと考えられる。

当初の複廊の桁行の柱筋に揃えて、各柱位置のほぼ中間の位置に、礎石及び礎



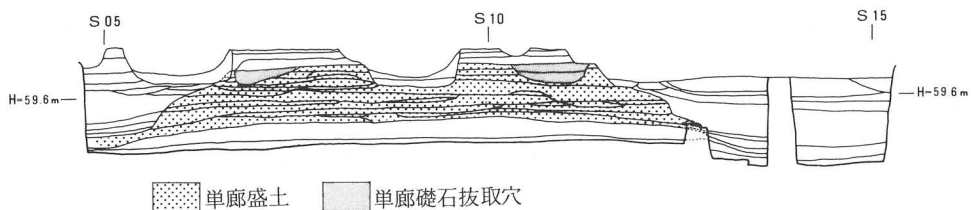
第30図 N9ライン基壇土層図

石抜取穴を検出した。柱間寸法は約4m、4間分である。この遺構は再々建回廊か、あるいは奈良時代の複廊礎石をも利用した桁行柱間寸法の狭い建物かもしれない。後述する西南隅区で検出した暗渠と対応する位置に、東南隅でも近世まで流れていた幅80cmの水路がある。当初は暗渠があり、その位置に近世まで水路が生きていたと考えられる。

複廊の抜取穴は2時期認められて、上層では17世紀初頭の時期の土器片を含むので、2回目に礎石を抜取ったのは17世紀初頭であろう。

**東北隅区** 東北隅の発掘区は、昭和43年に杉山信三氏によって発掘調査が行われ、その際基壇外装、複廊の礎石抜取穴4カ所を検出している。東北隅区は、全体に削平されていて遺構ののこりが悪いが、今回の発掘調査では単廊・複廊の礎石抜取穴や基壇拡幅の痕跡などを検出した。複廊抜取穴の一部は深さ5cmほどと極めて浅く、入隅部では抜取穴を検出できなかった。東北隅区で検出した凝灰岩基壇外装は長さ60cmの凝灰岩で、この石の下に玉石を根石として並べている。この基壇外装は、東南隅区にのこる当初の基壇外装に比較し観察すると、当初の羽目石を横にして再利用していると判断できるので、当初の基壇外装が荒廃したために修復していると推定できる。基壇の東外側では瓦堆積を幅50cmで検出した。複廊の基壇入隅の内側に接する位置には、L字型の溝があり、溝埋土には瓦を多く含んでいた。この溝は後世の回廊に伴う溝と思われるが、性格は不明である。東北隅区でも単廊用に造成した基壇の両側に拡幅して版築を行い、複廊基壇を造成していることを確認した。

**西南隅区** この発掘区の南辺、西辺には後世の池・溝があり、基壇の南と西の基壇外装を破壊していることが判明した。しかし、回廊基壇は遺存していて、単廊礎石抜取穴、複廊礎石抜取穴、複廊建設の足場穴、暗渠排水路などを検出した。



第31図 E27ライン基壇土層図

単廊の柱位置のうち西面回廊の西側柱通りの礎石抜取穴は検出できなかったが、東側柱通りを検出しているため、西側の礎石抜取穴は削平されてしまったと考えられる。

複廊の礎石抜取穴は南の池で破壊された1カ所を除いて想定できる位置すべてで検出した。この礎石抜取穴を断割って観察したところ、穴の底部には瓦を敷いている。複廊の礎石位置のちょうど中間に、約30cmの方形の小掘立柱穴を検出した。複廊を建設する足場穴と考えられる。南面棟通り西端には凝灰岩切石の地覆石があるが、削平されていて石の底が2～3cmほどしかのこっていない。複廊基壇はここでも単廊用に築造した基壇を拡幅している。西南隅入隅の角に回廊を横切る幅1mほどの南北溝があり、溝の内側には凝灰岩片や粉状の凝灰岩が散在していた。この溝はもと凝灰岩石組暗渠であり、凝灰岩を抜き取っていると考えられる。溝埋土から出土した遺物の年代から、この溝は11世紀まで存続していた。

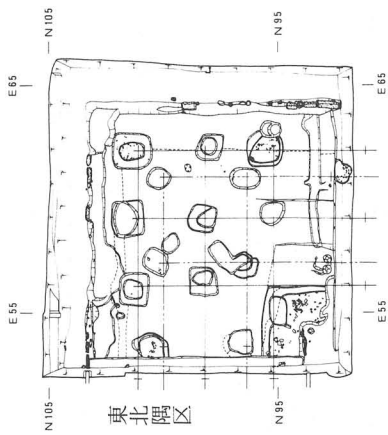
西南隅入隅の角に、幅1mの東西溝がある。瓦製土管を使用した暗渠施設で、12世紀頃に掘削し据えている。この頃には、西面回廊が存在していたのであろう。

## まとめ

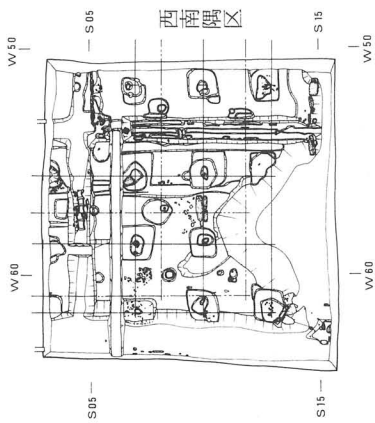
三発掘区での成果をまとめて回廊の遺構についての所見を整理する。

**単廊** 金堂の発掘調査成果に基づいて単位尺0.297mとすると、単廊の遺構は桁行12.5尺、梁行12.5尺である。中門桁行5間として、単廊の中門取付部は2間が15.5尺を二ツ割するか、取付部1間が3尺ほどととくに狭くなるのかもしれない。単廊南面回廊は取付部1間と隅部を除いて柱間数12間である。東南隅区・東北隅区での柱位置を計測して割付けると、隅部を除いて柱間数28間となる。単廊の基壇盛土は、縁がゆるく傾斜して下っていることから基壇外装までは完成していなかった。また単廊礎石は一つも残っておらず、抜き取られている。

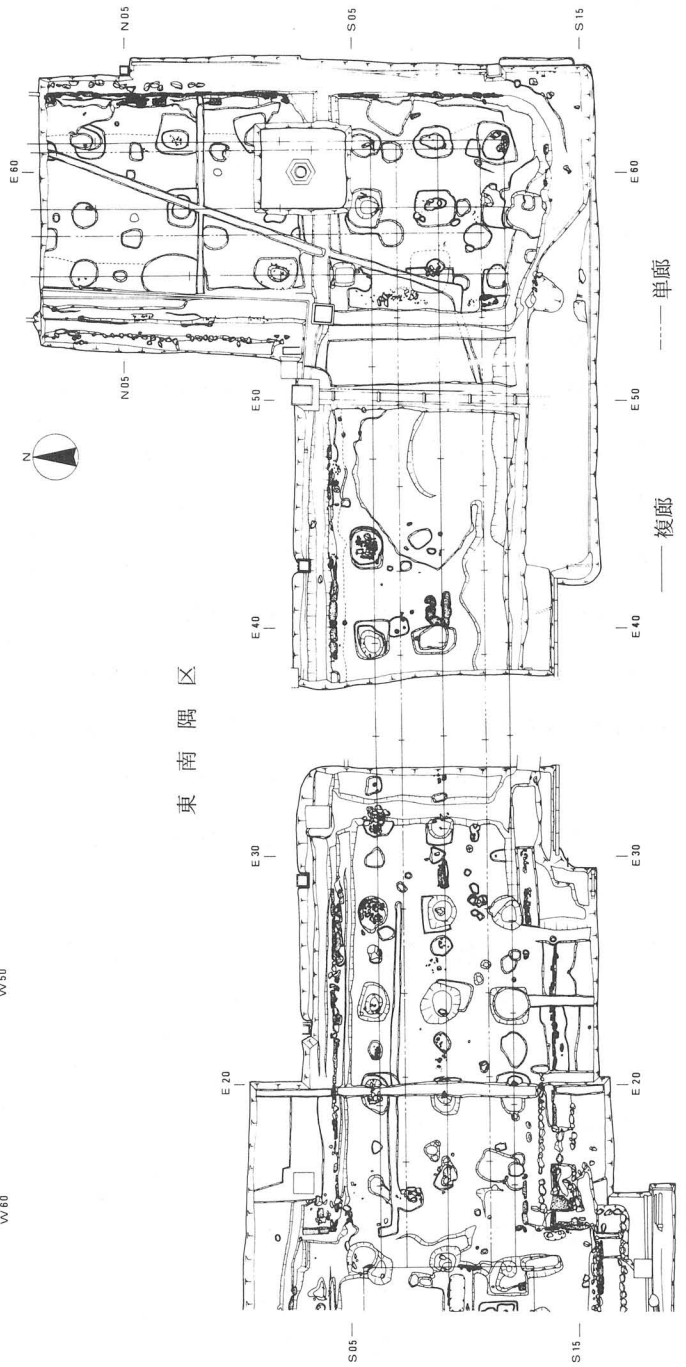
**複廊** 複廊は単位尺0.299cmとした桁行13.5尺と考えるのが遺構によく一致する。ただし、中門に取付く東2間は12.5尺である。複廊基壇は、単廊の基壇を伽藍外側に約1.5m、内側に約2mと両側に拡幅している。複廊の南面回廊・北面回廊は単廊の棟通り位置を変えずに建設している。



東北隅区



西南隅区



東南隅区

第32図 薬師寺回廊発掘遺構図

基壇幅は基壇外装外面で計ると、東面回廊では約10.3mあり、中門東の南面回廊では約9.80mでやや狭い。基壇幅を34尺とすれば梁行2間10尺であるから基壇の出は7尺となる。東面回廊は南北中軸線に対して北で東へ $0^{\circ}19'49''$ 振れ、南面回廊は東で北へ $0^{\circ}28'39''$ 振れる。複廊は、その礎石を2回抜き取っており、据える時の掘形と抜き穴がある。上層の抜き穴の埋土は汚れており、中世末から近世初期の土器片の出土が見られるところから、17世紀初頭まで複廊礎石が据えられていたと考えられる。

### 遺物

大量の瓦や、その他に塑像・金属製品が出土した。塑像は頭部破片が出土している。出土地点は近世の溝であるが、東塔の南に位置する発掘区からの出土であり、火を受けておらず、本来東塔にあったものと考えられる。多量の瓦には奈良時代から中世までの軒瓦を多様に含んでいる。創建時の軒瓦の組み合わせ、軒平瓦6276型A種、軒丸瓦6641型G種・H種の出土量は、これまでの薬師寺での発掘調査と比較して少ない。この軒瓦は、東南隅区の複廊の礎石据付掘形や単廊基壇南端の瓦敷列から出土しており、注目される。東北隅区では、瓦堆積から、上記の6276型式A種・6641型式G種や6304型式E種があり、これに巴文様のある丸瓦が混在して出土している。また、東南隅区中央の瓦溜からは、中世の瓦が多量に出土した。

### 回廊の造営と変遷

薬師寺回廊が当初は単廊で計画されたとする、藤原京にある本薬師寺回廊は単廊であったと考えられる。そして平城京薬師寺は、伽藍中心建物と同様に、回廊も藤原京薬師寺を踏襲して計画されたのである。

単廊が複廊に先行すると、いつ改造したかが問題となろう。「薬師寺縁起」によれば、回廊は天禄4年に火災に遭い、その後再建している。単廊の基壇を複廊の基壇に拡幅した部分には、遺物をほとんど含まず焼土は皆無である。もし単廊が罹災していれば、基壇拡幅の土の中に焼土などが混入することが考えられる。また基壇上面には焼土に存在せず、複廊基壇外側の雨落溝を埋めるように焼土層

がある。この所見から天禄の火災に遭ったのは複廊であることが分かる。単廊が完成していて、その後天禄年間までの間に単廊から複廊に建替えたとすると、それは大仕事であり、こうした変更は、回廊の火災とか倒壊などを契機にしなければ考えられないが、そのような罹災の記録はない。とすれば単廊を複廊に建替える契機が見当らず、単廊が完成したかどうかが問題となろう。基壇断面の観察から、単廊基壇は外装に至るまでは工事は進展していない。また単廊礎石の抜取りと単廊基壇から複廊基壇への拡幅作業は同時に進行している。そこで、単廊基壇の築成が礎石を据えるほどまで進行した段階で、計画変更されて複廊にしたと考えられる。三発掘区とも単廊の遺構を検出しているので、単廊建設の計画は四面に及んでいた、と判断できる。

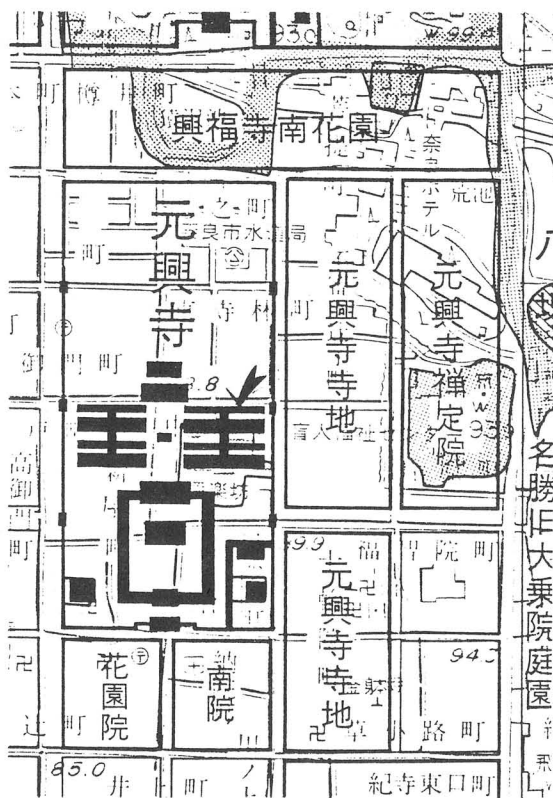
複廊・東面回廊を、東南隅区・東北隅区で柱位置を計測して、1尺=0.299cmで柱間13.5尺で割付けると隅部を除いて25間となる。東塔東側の既発掘調査とも矛盾はない。この柱間数は「薬師寺縁起」の東面回廊の柱間数24間と一致せず、同縁起の西面回廊の柱間数25間に一致する。東面回廊を全面発掘していないので、東面回廊の柱間数は確定できないが、今回の発掘調査から見る限りでは、東面・西面ともに25間と考えた方が妥当であろう。ただし、東面回廊に門の存在を想定すれば、西面回廊より柱間数は少なくなることも考えられる。複廊・南面回廊の柱間数には、中門取付部と隅部を除いて各10間、中門の東西両側で20間となり、「薬師寺縁起」の記載と一致する。

天禄の火災以後の再建回廊については、これまで不明であった。中門東の中世以降の建物や、西南隅区の12世紀頃の暗渠施設は、再建回廊を考える一つの手懸りになる。また、中門と単廊の柱間寸法や取付きの関係は、今回の発掘調査では確定せず、今後の課題である。藤原京薬師寺の発掘調査の進展と相俟って解明が期待できる。

なお、薬師寺回廊関係史料抄については、75ページを参照されたい。



調査地は、元興寺(極楽坊)北門へ通じる小道の入口から、東へ3軒目(紀藤宅)と4軒目(木村宅)で、東西道路の南側にあたる場所である。調査は両者とも個人住宅の改築に伴い行ったものである。付近は、元興寺旧境内の伽藍推定復原からすると、東の大房に付属した小子房の存在が推定される。両敷地とも南北にきわめて細長い土地で、発掘トレンチも狭長なものとなり、西区では1.6m×11.5m、東区はそれより1.5m東へ離れてトレンチ南端をほぼ合わせ、2m×19mの発掘区を設けた。奈良時代の遺構面は、現地表から北で50cm、南で80~90cmであったが、その上部はほとんど近世以降の攪乱によるものであった。遺構面には大小の土壇等があるが、奈良時代と確定できるものはない。ただこの遺構面は、両トレンチとも、北の東西道路南肩より南へ約14mの位置から南半は、厚さ約1mの整った版築層からなっており、ここより北半では、版築面は徐々に傾斜して下り、その上部には若干瓦片を含んだバラス混りの黄褐色の整地土が堆積していた。この版築層は、南北幅8m以上、東西幅は両トレンチ合わせ5m以上を確認しているが、北半の整地層上面ともに、礎石抜取痕跡や基壇端部等の遺構を見つけることは出来なかった。なお、この両遺構面は、北にくらべて南が約35cm高いが、既に相当削平をうけていると考えてよい。約1mの版築層下は、バラスを含んだ茶褐色砂質土の地山であった。



第33図 元興寺旧境内発掘調査位置図